

エッセイスト 岩田 裕子

四姉妹の幸せ

四人姉妹という設定には、なぜか子どものころから興味を惹かれた。四人もいれば個性がきわだつ。団体生活みたいで面白そうだった。小学生のころは、「若草物語」に夢中になり、日本の四人姉妹、「細雪」に興味をもったのは、中学生だったか。その頃、午後や深夜のテレビに古い映画がよく登場しており、それを見たのがきっかけだったかもしれない。谷崎潤一郎の原作は、今手許にある中央公論社版で881ページと、わたしの小指の長さくらい厚く、読みきるのにかなり時間がかかったのをおぼえている。

時代は第二次世界大戦前夜の昭和11年からそのまったなかである昭和16年まで。舞台は、関西。兵庫県芦屋の蒔岡(まきおか)家とその四姉妹の運命を描いたお話しだ。

蒔岡家は船場で指折りの旧家だったが、先代の最後から傾き、今は、没落してしまっている。長女鶴子、次女幸子は養子である夫と平和に暮らしているなか、三女雪子の婚活、四女妙子の恋愛沙汰を中心に、当時の風俗や美しい四季の風景を絡めながら描かれている。

ヒロインは華やかな美貌の次女幸子。谷崎の妻、松子夫人をモデルとしている。長女鶴子はどちらかという旧来の普通で地味な、波風たないことを志向する奥様、三女雪子は一番きれいといわれているが、おとなしく、まわりは彼女の縁談をきめるためにやきもきすることになる。そのわりに意外と芯は一番しっかりしているのだ。末っ子の妙子は早くから駆け落ち騒ぎをおこし、その後も数多くの恋愛遍歴を起こす。四姉妹で唯一、仕事を持ち、人形づくりや洋裁などで収入を得ようとする、当時のモダンガールである。

この原作は、いままでに三度映画化されている。

表組みにすると古い順から次のようになる。

A『細雪』(1950年、新東宝) 監督:阿部豊
出演:花井蘭子、轟夕起子、山根寿子、高峰秀子(姉妹順)、伊志井寛、河津清三郎、田中春男、田崎潤、浦辺粂子ほか

B『細雪』(1959年、大映) 監督:島耕二
出演:轟夕起子、京マチ子、山本富士子、叶順子(姉妹順)、川崎敬三、根上淳、菅原謙二、船越英二、山茶花究、浦辺粂子ほか

C『細雪』(1983年、東宝) 監督:市川崑
出演:岸恵子、佐久間良子、吉永小百合、古手川祐子(姉妹順)、伊丹十三、石坂浩二、岸部一徳、桂小米朝ほか

著作権の都合により非掲載

「細雪」1983年 DVD発売中

¥5,040円(税込)

監督:市川崑

出演:岸恵子、佐久間良子、吉永小百合

古手川祐子(姉妹順)

伊丹十三、石坂浩二、岸部一徳、桂小米朝、ほか

DVD発売・販売元:東宝

物語が長いので、Aは、上下2巻。Bのビデオはかつて存在したようだが、今回は見つからなかった。CのDVDは、上映時間2時間23分ある。

今回はAとCを入手し、何回か繰り返しみてみた。

83年版 雪子の青春

市川崑監督の83年版は、映像美が特徴だ。タイトルバックの満開の桜に目をみはる。キャストをみていただいでわかるように、当代の美女たちが、絢爛豪華な衣装をまとって現れる。着物は反物から、姉妹のイメージに合わせて染められているので、1億5千万円の費用がかかったという。

Aは、1950年という戦後すぐに作られて

いるので、もちろんモノクロだし、雪子の婚礼衣装を広げるシーンも、まったく地味である。83年版では、このシーンの艶やかさこそ、最大の見所のひとつでもあるのだけど。

原作が長いから、どこに焦点を当てるかでまったく変わってくるのだが、50年のほうは、高峰秀子演じるこいさん(末のお嬢さんこと)に焦点があたり、83年は、吉永小百合ふんする雪子为中心になっている。

原作を読めば、当時だったら、驚きあきれような妙子の行動のほう詳しく記述されているのだが。市川監督にしてみたら、83年当時には、自立を目差し、苦勞する女性も、恋愛に自由奔放な女性もまったくめずらしくもなんともない。逆に、自分からは動かず、すべてを回りに任せ、美しく控えめな深窓の令嬢こそ、謎めいて興味を惹かれたのではないだろうか。

50年版では、おとなしいだけで、まったく魅力の感じられない雪子が、こんなに複雑な輝きをもっていることを、83年版は教えてくれた。

確かに、この映画の吉永小百合は恐ろしく魅力的だ。この女優の映画を結構たくさんみているのだけど、こんなにデモーニッシュな吉永小百合を他でみたことがない。どの映画でも美しいが、あまりに優等生的でわたしは興味をひかれたことがなかった。

市川崑の「細雪」は、おとなしい雪子の表面には見えない魅力、優等生である小百合の隠された色っぽさ。それを描くために作られたのだと思う。そのためには、ストーリーさえ、大幅に変えてしまっている。おとなしくはずかしがりやの雪子が、意外と男の人に足をみられることを、なんとも思わない。かすかな目線で、幸子の夫、貞之助(石坂浩二)を誘惑する。貞之助は、義妹の結婚を嘆き、ひとり酒を飲むという、原作を知っているものにしてみたら、驚愕のシーンが展開するのだ。

いつも受身でいるようで、数々の縁談がどんだんためになり、物語の最後にやっと華族様の孫である理想的な夫を見つけるのだが、市川崑は、ここに雪子のしたたかさを見ている。

ラストシーンで、ふたりの姉たち、鶴子と幸子が、「あの人ねばらはったなあ」と言い合う、そのことばに集約されている。

父が亡くなる前に作られた華麗な衣装。それに比べ、父の存命中にまだ小さかった妙子は、着物もなく、ほっぼらかされている。周囲が雪子の縁談、雪子の心情であったふたしているというのに、妙子のことは誰も気にしない。

83年版の妙子はあまりにかわいそうだ。自分のせりふとして言わされているように、「みんなが雪子ちゃんばかり大事にするから、自分はめちゃくちゃなことをしてしまった」ということになる。これでは、本当に貧乏くじで、豪華な衣装や調度とともに、子爵に嫁ぐ雪子の燦然と輝く未来にくらべ、妙子は蒔岡家のみそっかすとして、当時は地位が低かったらしいパーティーの三好と結婚する。新居は、隙間風のはいつてきそうな、ぼろアパートだった。彼女の荷物はなにもない。

83年版では、雪子の描き方は最高に面白かったが、それに比べ、妙子の描き方はみもふたもない。妙子の人生感を変えた、13年の神戸の大洪水が、まったく無視されているからだ。妙子の長年の恋人である、奥畑の啓ぼん(桂小米朝・当時)はごろつきみたいだし、啓ぼんの元奉公人だった恋人、板倉(岸部一徳)に関しては、一体どこがよくて好きになったんだか、まったくわからない。

妙子を演じた古手川祐子は、小百合と14歳も違い、他の二人が岸恵子と佐久間良子とくれば、キャリアも年齢もあきらかに違いすぎる。他の映画では、いるかいないかわからないくらい鶴子が最初から最後まででているのは、岸恵子という女優が演じているからだろう。市川崑の細雪は、谷崎ではなく、あくまでも市川崑の細雪なのだろう。

50年版 妙子の青春

ビジュアルの魅力は83年のほうがくらべものにならないほど高いが、脚本は83年より50年のほうが高いとわたしは思う。何度見てもみあきず、発見があったし、原作のイメージもこわされなかった。こちらは妙子(高峰秀子)に焦点が当たっているのに、雪子は女性としてはただただおとなしいタイプ、妙子にとっては、自分を観察し、意見もいってくれるやさしい姉ではあるけれど、女性として、とくに輝きを感じることはない。(こちらが原作どおりなので、この雪子をあれだけ華麗にふくらませた市川版にはまったく驚くのだ)

妙子は早くから自立している。人形をつくって自分で売り、人形教室で生徒をちゃんと指導する当時はめずらしかった職業婦人なのだ。アーティストとして、人形を作る一方、販売も上手にできるという、なかなか両立しない才能を彼女は持っている。そのほか、日本舞踊もたしなみ、発表会で

は艶やかな姿で踊り、洋裁も習っている。

83年版の古手川は24歳、50年版の高峰は26歳で同じ役を演じているのだが、2つ違いとは思えないほど、高峰はしっかりしている。

彼女には、長年の恋人、奥畑の啓ぼんがいた。彼とは20歳のときに駆け落ち騒ぎを起こしてしまったが、その後、仕事を始めた妙子にとって、三男とはいえ、とくに仕事もせずに遊んでいる啓ぼんはなんか頼りない。実は奥畑商会は、宝石商なのだ。妙子にぞっこんの啓ぼんは、ときどき店の指輪やブローチをもちだしては、彼女にあげている。

あきがきてしまった恋人だが、それなりの情があるし、同じ世界の住人だし、それになにより、彼は妙子のスポンサーでもあるのだ。ダイヤモンドや真珠の指輪、ネックレス、色とりどりのカラーストーン、ジュエリーのほか、上等のコートやアフタヌンドレスをオーダーでつくってくれたり、ときどきお洒落なバッグをプレゼントしてくれたりする。自身、お洒落に気を使い、趣味人でもある啓ぼんは、プレゼントをセレクトするセンスもかなりいい。気安さから好き勝手をいいながら、ときどき啓ぼんに甘えて見せるのは、そんな事情があるからだ。

しかし、妙子の人生が大きく転換する日が来た。歴史に残る大惨事、神戸の大洪水にあってしまったのだ。もう命も危ないというそのとき、妙子を助けに来てくれたのは、アメリカ帰りのカメラマン、板倉だ。自分の命も顧みず、勇敢に水のなかを泳ぎきり、妙子を安全なところまで送り届けてくれた板倉に、彼女は感謝だか、恋心だかわからない感情を抱く。

その後、彼女はことあるごとにつぶやくのだ。私の気持ちがわからないという人は、今死ぬかもしれないというそういう経験をしたことがないからだ、と。これはわたしも経験がある。災害、事故、戦争、病気にかかわらず、死を前にした経験をしたとき、その人が180度変わってしまうことはあると思う。人生観が変わる。それまで上手に隠してきた、本当の自分があらわになる。もう何も知らなかった頃には戻れない。

板倉は、アメリカにいくまえ、奥畑商会のでっち(奉公人)だった。なんらかの事情があったようで、啓ぼんには逆らえない。啓ぼんのほうも、今は洋行帰りのカメラマンとはいえ、元奉公人という気安さから板倉を下にみている。

板倉と妙子は恋人になるのだが、板倉は啓ぼんにはっきりと宣言できない。男らしい男なら対決すれば、と思うのだが、これがわたしの知らない当時の空気だったの

だろう。

妙子もまた、趣味のよい指輪やブローチに惹かれて、完全に啓ぼんを切ることができない。気持ちは自立したキャリアウーマンではあっても、それだけの収入がなかったからだろう。それに妙子はやっぱりいい家のこいさんで、贅沢なものが大好きなのだ。宝石箱にはいった数々のジュエリーを見ると、いつもは気の強そうな妙子の顔がやわらかく、ほほえんでみえる。

最後のダイヤモンド

やがて板倉は耳の病気で突然死んでしまう。自分を見失った妙子は、誠実な青年パーティーの三好を誘惑し、やがて妊娠する。その間に啓ぼんのばあやが、うちのぼっちゃんと結婚していただけませんか。と蒔岡家を尋ね、姉たちもそれを勧めたのだが、妙子は三好と暮らすことを決意した。貞之助は、啓ぼんにお金を返し、妙子も彼に買ってもらったものを返したから、妙子の荷物は本当に少ししかない。

83年版では、まるでごろつきのように描かれた奥畑の啓ぼんだが、この経緯をみれば、彼も妙子にだまされ、かわいそうな面があると思う。働き者の妙子は同じように、活力のある板倉に惹かれたのだが、妙子の出方しだいでは、遊び人の啓ぼんもここまでひどくならずすんだかもしれないと思う。

しかし妙子の将来はどうなるのだろうか。板倉と将来を誓い合うとき、板倉は「こいさんを幸せにするため、一生懸命仕事します」といい、妙子もまた「私も一生懸命仕事します」と答えた。三好もきつと同じタイプだろう。それは苦難の道であり、話題といえば、お花見や歌舞伎見物という姉たちの家庭とはまったくちがうものになっただろう。

妙子は、苦難の道を選んでしまったが、それを克服していけるだけの才覚もエナジーも持っている。

妙子の宝石箱で燦然と輝いていた、真珠やダイヤモンドや数々の色石は、すべて奥畑に返してしまった。妙子は今、無一物だ。自立を選んだとはいえ、もともとお嬢さん育ちで、贅沢好きな妙子は、それでもやっていけるのだろうか。

ところで50年版では、ラストシーン。妙子のもとに最後にひとつの宝石が贈られてきた。これは原作にはなかったと思う。長女鶴子が送ってくれた、母の形見の指輪だった。それは大粒のみごとなダイヤモンド。この指輪が途中で売られずに、いつか晴れやかに成功した日、すっかり貫禄のついた妙子の指を飾っていたら、どんなにかうれしいかと思う。

著者よりひとこと

「細雪1959年版」に関しては、洪水のシーンがもう少しちゃんと描かれていたような気がするのですが、詳しく覚えていないのが残念です。わたしのなかでは、幸子の夫、貞之助と、啓ほんは、59年版の山茶花究と川崎敬三が一番原作のイメージでした。妙子役は、もともとは若尾文子に決まっていたのが、彼女の病気で叶順子の抜擢になったとか。叶はこの役で主役級の女優になったそうです。私としては、大好きな若尾文子の妙子をぜひ見てみたかったです。きっとわたしのなかのベストワンの「細雪」になったはず。

文化出版局「ミセス」で連載中の「宝石を巡るお話」は、バージョンアップして4年目に突入。また、「PHPスペシャル」において「轟惑のジュエリ」という連載が始まっています。6月には「ブランドジュエリー」で、かなりのページを書かせていただきます。



岩田 裕子(いわた ひろこ)

東京都新宿区生まれ。
慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)。編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。著書に「夢みるジュエリ」「ダイヤモンドA to Z」(共に東京書籍)「21世紀の冷たいジュエリ」(柏書店松原)「恋するジュエリ スターが愛した宝石たち」(河出書房新社)

http://www.geocities.jp/yamaneko1313/index.html

(作品の紹介や日記も公開していますので、気軽にお立ち寄りください)

岩田裕子 著
主婦の友社 ベストBOOKS
新刊
「幸せをはこぶ 天然石&ジュエリー」

定価:1,400円(税別) 発行:主婦の友社
発売:2008年12月

若い女性なら誰もが好きな「チャート」から始めた、ジュエリー初心者のための、わかりやすい入門書です。今回は、多くの方に手にとっていただけるよう、私らしさというより、読みやすさをこころがけました。一般の顧客の方にお勧めいただければ幸いです。内容としては……地球と大自然が、奇跡と偶然で創り出した美しい宝石。宝石は、身につけてこそパワーと美しさを自分のものにすることができます。自分を守ってくれる石を知りたい人、その日にどんな石を見つけたらいいか迷う人、自分へご褒美にどんな石を選んだらいいかわからない人、愛する人に贈りたい贈られたい石を探したい人……この本はそんな人たちのために、それぞれの石の鉱物的な特徴、生い立ちや秘められた力、使い方などをていねいな解説とともにアドバイスする、ジュエリーのすべてがわかる超保存版。ジュエリーショップで実物にふれられる、憧れの宝石、人気のジュエリー、おなじみの宝石を中心に網羅しました。他に、星座石、自分が美しくなれる石、成功に導く石、恋をかなえる石、季節や気候に合う石など。